

2019年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
(発達障害に関する通級による指導担当教員等専門性充実事業)
成果報告書 (I)

実施機関名 (徳島県教育委員会)

1. 問題意識・提案背景

平成18年4月の学校教育法施行規則の一部を改正する省令により、LD、ADHDの児童生徒が通級による指導の対象となり、年々その数は増加している。徳島県においても、小中学校では、平成25年からの5年間で1.2倍の児童生徒が通級による指導を受けており、令和元年度は613名が指導を受けている。また、平成30年度からは高等学校における通級による指導の制度化を受け、徳島中央高等学校において運用を開始した。

発達障害の可能性のある児童生徒の特徴として「失敗に対する耐性の弱さ」が挙げられ、こうした児童生徒の学習意欲の維持には、つまずきに応じた教材を活用した「エラーレス(失敗なし)」な取組が有効と言われている。また、他の特徴として「否定的な指導(叱責など)による二次的な障害の併発」が挙げられ、これに対しては「望ましい行動を育てる」ことに重点を置いた「ポジティブな行動支援」の有効性が示されている。

徳島県では、平成27年度から平成30年度の間、研究拠点校(東みよし町立加茂小学校)において専門家との協働のもと、集団指導や個別指導の充実を目指すために、つまずきやすい学習課題を分析したり、通常の学級での教科指導等における教員の専門性の向上に取り組んだりした。この結果、児童らの成功体験が増加し、難易度の高い課題に前向きに取り組む様子が見られたり、授業中や休み時間の問題行動が減少したり、授業に必要な物の準備や着席行動といった自発的な学習準備行動等の向上が見られたりするなどの成果が確認できた。このことから、児童一人ひとりの実態に合わせた個別の指導の充実が、児童の自信につながり、集団での指導の礎になることが分かった。この成果は、個別の指導(特別支援学級や通級による指導)を受けている児童が、集団での指導(通常の学級における一斉指導)を受け際にも、必要不可欠な配慮であるといえる。こうした個別指導と集団指導をつなぐ場として、通級による指導内容の充実や担当教員の専門性向上を図る必要がある。

以上のことから、平成31年度においては、「小学校での実践から得た成果をいかした高等学校における通級による指導の充実」、「小学校におけるこれまでの実践を踏まえた担当教員への研修体制の構築」や「関係機関との連携強化による更なる指導の充実」を目指す。そのため、加茂小学校及び徳島中央高等学校を拠点校として指定し、実践研究を行う。

2. 目的・目標

高等学校における通級による指導内容の充実を図るとともに、発達障害に係る通級による指導の担当教員に対する研修体制を構築する。また、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒を含む、学びにくさのある児童生徒に対する指導方法等における教員の専門性の向上を図る。

そのために、専門家による「学校コンサルテーション」を通して、発達障害の可能性のある児童生徒に対する通級による指導の自立活動等において、その特性や実態を踏まえた学習指導の方法について実践研究を深める。

さらに、授業内容を理解するための前提となる「話者への注目」「教科書等の準備」「正しい姿勢」などの「学習準備行動」スキルについては、「ポジティブな行動支援」の考え方に基づく取組を推進することで、有効性の検証を行う。

通級による指導での成果が通常の学級においても生かされ発展的なものとなるよう、通級による指導の担当教員と通常の学級の担任等との適切な連携方法並びに校内支援体制の強化や通級による指導を受ける児童生徒を含んだ全ての児童生徒への指導・支援体制の充実のための手法を明らかにする。

3. 主な成果

(1) 通級による指導担当教員の専門性向上

ア. 職務（悉皆）研修として5回実施

- ・平成31年4月5日（金） 参加者：通級による指導担当教員13名
新担当者を対象に実施。通級による指導教室の運営と教育課程（自立活動の指導の基本）について講義を行った。
- ・平成31年4月17日（水） 参加者：通級による指導担当教員43名
全担当者を対象に実施。個別の教育支援計画と個別の指導計画について講義を行った。また、通級による指導担当経験者による実践発表を実施した。また、本年度内作成予定にしていた「通級による指導ハンドブック」についての原稿案の検討を行った。
- ・令和元年5月17日（金） 参加者：通級による指導担当教員12名
新担当者を対象に実施。合理的配慮についての講義と、保護者とのかかわり方と教育相談の実施方法、巡回相談員による言語指導と言語についての相談の実際についての講義を実施した。
- ・令和元年7月9日（火） 参加者：通級による指導担当教員46名
全担当者を対象に実施。徳島県立総合教育センターに寄せられる相談の実態、「ポジティブな行動支援」をベースにした通級による指導の在り方、徳島大学病院言語聴覚士による構音障害のある子供への指導、発達障害者総合支援センター職員による相談業務の実際等について講義を行った。
- ・令和元年12月5日（木） 参加者：通級による指導担当教員51名
全担当者を対象に実施。県外講師（堺清恵会病院LDセンター所属のオプトメトリスト）による、「見る力」と学習上の困難の関連性についての講義と視覚能力のアセスメントを行うことができる「WAVES」についての講義を実施した。また、「通級による指導ハンドブック」の最終原稿案について検討を行った。

イ. 特別支援教育研修会（通級による指導担当教員のうち希望者のみ）の実施

日時	講師	内容
令和元年8月5日	大阪府和泉市立国府小学校指導教諭 井阪 幸恵	主題：「認知機能を高めるコグトレ～小学校での実践を通して～」 認知機能を高めるトレーニングであるコグトレの理論解説から、不器用さが情報処理・行為の認知過程上の問題であり、困難さの原因に基づいて適切

		<p>な支援方法を選択することが大切であると気付くきっかけになった。</p> <p>加えて、講演内容に基づく実践紹介及び演習を実施することにより、実際の学習画面で活用することができる視機能や運動機能向上につながる指導のアイデアを知り、経験することができた。</p> <p>○参加人数：県内教員100名 研修満足度：99.4%が満足と回答</p>
令和元年8月19日	鳥取大学医学部附属病院 ワークライフバランス支援センター 特任助教 大羽 沢子	<p>主題：「学習につまずきのある子供たちへの支援～算数授業のユニバーサルデザイン～」</p> <p>算数障害に関する解説を踏まえ、数や数理的処理のつまずきの分析の仕方について知ることができた。また、それぞれのつまずきに対する効果的な指導手続きや学習上の配慮についても知ることができた。</p> <p>算数障害のある子供への個別の支援のみならず、学級や学校全体で取り組める算数の授業のユニバーサルデザインの紹介などの内容から、学校教育環境の在り方についても様々な情報を得ることができた。</p> <p>○参加人数：県内教員92名 研修満足度：98.8%が満足と回答</p>

ウ. 発達障害教育講演会を実施

日時：令和元年11月3日（日・祝） 午後1時30分から午後3時40分まで

会場：徳島県立総合教育センター ホール

対象：幼・小・中・高・特別支援学校教職員、福祉施設職員等

県外参加者については、先着順で受付（定員制）

内容：講演「幸せな学校を創るために～アドラー心理学からの提言～」

講師：駒澤大学文学部心理学科 教授 八巻 秀 氏

成果：講師は、臨床心理学やアドラー心理学に精通し、都内に私設の心理相談室

を構えるなど、臨床経験が豊富であり、本講演会でも、アドラー心理学を分かりやすく解説してくださり、その活用を通して学校現場でどのようにして「幸せな学校を創る」のかについて具体的に話していただいた。人が真に幸福になる鍵を握るのは「勇気」であり、これを高めるためには対人関係においてポジティブな循環を意識して、声に出して伝えること、楽観主義を取り入れて行動していくことが大切であるという。「勇気」を高める関係を創ることから、共同体感覚を育み合うことによって「幸せな学校」の創出に至ることができるという貴重な講演内容であった。

当日は、266名の参加であった。参加者からは、「参加体験型の講演内容によって楽しく受講できた」、「自分自身のポジティブな意識が向上した」、「家庭や職場、地域でポジティブ発言や行動を実践していきたい」との感想が寄せられた。

(2) 「通級による指導ハンドブック」「通級による指導啓発資料」の作成

本県では、通級による指導を利用する児童生徒数が増加傾向にある一方で、担当する教員の退職や交代等により、経験の浅い教員の割合が多くなる見込みである。このことから、通級による指導担当教員の専門性向上を図ることを目的として、徳島県立総合教育センター主催の研修講座に加え、新たに「通級による指導ハンドブック」を制作することとした(図1)。また、通級による指導担当教員が抱える課題意識として高かった校内の教職員や保護者に対して、通級による指導の理解・啓発を行うことを目的とした「通級による指導啓発資料」も併せて制作することとした(図2)。

掲載する内容については、通級による指導についての制度や教育課程、校内の体制や運用、関係機関との連携等に関する情報について、通級による指導の担当者からの意見や他県の冊子の内容などを踏まえて判断した。また、通級による指導担当教員から提供された実践事例や高等学校の通級による指導の実践紹介を掲載することにより、情報共有も行えるように配慮した。

これらの成果物は、県内各市町村教育委員会や通級による指導実施校等に配付して、積極的な活用を推進していく。さらに、徳島県立総合教育センターが主催する通級による指導担当教員の職務研修で研修資料として活用する。



図1 通級による指導ハンドブック



図2 通級による指導啓発資料

(3) 子供学習教材作成のための教員養成プログラムの運用及び改善

島宗理教授（法政大学）や野田航准教授（大阪教育大学）などの専門家の指導のもと、子供学習教材を開発した。新たに開発したのは算数科1年の「たすのかな・ひくのかな」単元の事前学習教材である。この単元は、文を読み、たし算かひき算かを判断し立式するという学習内容であるが、ここでつまずく児童がとても多いことが指摘されていた。そこで、専門家の指導を受けながら、学習教材作成のための研修を実施、拠点校の教員と協力して開発した（図3）。

また、拠点校や協力校（※開発した教材の妥当性を検討するため教材の実践に協力してくれる学校）の通級による指導教室及び通常の学級で本年度開発した学習教材や過去に開発したものを使用し、エラーレスの考え方に基づく算数科の指導を行った。

本年度開発した学習教材については、徳島県立総合教育センターのホームページにおいて公開する（<http://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp>）。さらに開発した学習教材は、冊子化し、研修会等で活用する。










<p>「たすのかな ひくのかな」3-1-2 STEP03 キーワードのある/ない絵+文を読み、たし算・ひき算を判断(混合) せいけい____もん まちがい____もん かかたじかん()</p> <p>たしざん ひきざん このけいさんでつかうのは どっち? ○をつけてこたえましょう。</p> <p>1 けえきと どおなつを あわせると なんこ ですか。</p>  <p>このもんだいには(たしざん・ひきざん)をつかってこたえます。</p> <p>2 はとが 6わ とんでいくと なんわ のこりますか。</p>  <p>このもんだいには(たしざん・ひきざん)をつかってこたえます。</p> <p>3 おにぎりを 6こ たべると なんこ のこりますか。</p>  <p>このもんだいには(たしざん・ひきざん)をつかってこたえます。</p> <p>4 からすと すずめを あわせると なんわに なりますか。</p>  <p>このもんだいには(たしざん・ひきざん)をつかってこたえます。</p>	<p>「たすのかな ひくのかな」6-2-3 STEP06 絵と文を読んで、たし算・ひき算を判断し、適合する式を選択(混合) せいけい____もん まちがい____もん かかたじかん()</p> <p>このもんだいに こたえるには どのしきが よいですか。えらんだしきに ○をつけましょう。</p> <p>1 こうえんの すなぼと ゆうぐで こどもが あそんでいます。いま こうえんに いるのは ぜんぶで なんにんですか。</p>   <p>4にん 3にん</p> <p><u>10-6</u> <u>7-4</u> <u>10+4</u> <u>4+3</u></p> <p>2 おにぎりを あと2こつくると おにぎりは いくつになるでしょう。</p>  <p>6こ</p> <p><u>4-3</u> <u>4+3</u> <u>7-2</u> <u>6+2</u></p> <p>3 びんを 4ほんたおすと あとなんぼん たっているでしょう。</p>  <p>10ぼん</p> <p><u>10-5</u> <u>10-4</u> <u>10+4</u> <u>10+2</u></p> <p>4 おぼんの うえに しろいかつぱが5こ きいろいかつぱが3こ あります。おぼんの うえにある かつぱは あわせて いくつでしょう。</p>  <p><u>8-5</u> <u>8+5</u> <u>5-3</u> <u>5+3</u></p> <p>こたえをみて こたえあわせをしよう。</p>
---	--

図3 学習教材 算数科1年「たすのかな・ひくのかな」

(4) 学校コンサルテーションによる学習指導への支援

野田航准教授（大阪教育大学）をアドバイザーとし、拠点校において計3回の学校コンサルテーションを実施した。アドバイザーの助言を受け、学級毎の児童の実態に応じた授業改善に取り組んだ。

拠点校においては、算数科のアセスメントを行い、担任を中心とした全教員で結果を分析し、自らの学級の児童の実態に合わせて授業の中で用いる教材を作成・選定したり、新たに改良したりした。また、児童の意欲を喚起するための自己評価表も新た

に開発・導入して、個別的な指導においても活用することができた。「算数チャレンジ（算数の授業において実施したプログラム）」を拠点校の1～6年生において実施し、基礎計算の流暢性や正確性の向上等、成果が見られた。

(5) 「ポジティブな行動支援」の有効性の検証

拠点校で授業内容を理解するための前提となる「ポジティブな行動支援」の考え方に基づく取組を行った。「ポジティブな行動支援」が通級による指導を受ける児童を含む、すべての児童にとって有効な学級経営や学習指導の方法として機能することが確認された。

拠点校には重点的にアドバイザー2名を派遣して、各2回（計4回）の学校コンサルテーションを行った。その結果、「ポジティブな行動支援」の考え方に基づく取組が定着し、児童の不安や情緒不安定などの改善に役立った。さらに、学習準備行動や授業中の発表、話者への注目など学習に関するスキルの獲得ができた。

また、学校全体で取り組むポジティブな行動支援で培った力を背景として、発達障害の可能性のある子を含む通常の学級での配慮や支援が必要な児童の支援ニーズ表の作成、単元末テストの情報活用など、効果的な校内支援体制の構築に資する知見（「加茂小パッケージ」）を得ることができた。この成果は令和2年度以降の徳島県における特別支援教育コーディネーター研修会や通級による指導担当教員研修会等の職務研修で活用する。

さらに、その成果を徳島県立総合教育センターホームページにも掲載し、成果の普及・広報も積極的に行った（<http://manabinohiroba.tokushima-ec.ed.jp>）。

(6) 実践研究報告会の開催

令和元年度の成果報告会を次のとおり実施した。

日時：令和2年2月14日（金） 午後零時45分から午後4時50分まで

令和2年2月15日（土） 午前8時45分から午後零時15分まで

会場：徳島グランヴィリオホテル

対象：幼・小・中・高・特別支援学校教職員、福祉施設職員等

県外参加者については、先着順で受付（定員制）

内容：令和2年2月14日（金）

・実践報告（13：35～15：05）

・学校コンサルテーションに係るポスター発表（15：05～16：50）

事例発表：21事例

内容：令和2年2月15日（土）

・基調報告（9：15～9：50）

・シンポジウム（10：00～12：15）

参加人数：268名

○徳島中央高等学校並びに東みよし町立加茂小学校等により、それぞれの通級による指導の取組についてポスター発表を行った（写真1）。



写真1 ポスターセッションの様子

- 基調報告では、「通級による指導ハンドブック」、「通級による指導啓発資料」の作成、e-ラーニング等による「通級による指導担当者研修会」の内容充実に関する報告を行った。
- シンポジウムでは、拠点校の加茂小学校を中心に、幼稚園や小学校での取組について報告した。ポジティブな行動支援が、通級による指導を中心とする校内支援体制の強化につながるかということについて実際の取組に基づく実践報告となった（写真2）。



写真2 シンポジウムの様子

(7) 徳島県発達障害教育研究会の開催

令和元年度の発達障害教育研究会を次のとおり実施した。

日時：令和元年8月23日（金） 午前10時から午後4時まで

会場：徳島県立みなと高等学園

対象：小・中・高・特別支援学校教職員等

県外参加者については、高等学校、特別支援学校教職員

- ・意見交換会「関係機関との連携」（10：15～12：00）

アドバイザー：とくしま地域若者サポートステーション

部長 北野美加氏

徳島県発達障害者総合支援センターハナミズキ

係長 谷口和子氏

- ・情報提供「高等学校における特別支援教育の動向」（13：00～13：30）

- ・講演「発達障害と依存症」

講師：愛媛大学大学院医学系研究科 河邊 憲太郎 氏

参加人数：57名

○意見交換会では、「関係機関との連携」をテーマに、特別支援教育支援員配置の高等学校2校からの問題提起をもとに、参加者からの質問等について話し合った。参加者からは、「発表校の取組の状況を具体的に知ることができた」、「連携の必要性を理解した」、「関連機関の事業説明等から連携対応のヒントを得ることができた」等の意見が聞かれた。

○情報提供では、合理的配慮の情報や高等学校における通級による指導の制度と本県での取組事例を取り上げた。

○講演では、医学的な立場から、事例をもとに「発達障害と依存症」について学んだ。参加者はネット依存やゲーム依存等、発達障害と不登校について考えることができた。

4. 通級による指導における専門性のポイント

【小・中学校】

- 実態把握から具体的な指導・支援の手立てを考えるスキル
- 通常の学級の担任、特別支援教育コーディネーター、管理職等との協働力
- ポジティブな行動支援の考え方に基づく校内支援体制の構築・運営
- ポジティブな行動支援の考え方に基づいた児童の自己理解形成のサポート

【高等学校】

- 適切な実態把握と教員間の連携により、具体的な指導・支援の手立てを考えるスキル
- 生徒のニーズや目標に応じた授業内容を展開する力
- 通級による指導の担当教員間、通常の学級の担任、管理職等との協働力
- ポジティブな行動支援の考え方に基づく、生徒の自己理解形成と社会的自立に向けたスキル養成へのサポート

5. 拠点校における取組概要

【学校種：小学校（東みよし町立加茂小学校）】

（１）通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

目標設定や評価は指導と密接なつながりがあり、重要である。しかし、拠点校では、対象となる児童が多く、効果的な話し合いや目標設定等に至っていなかった。そこで、手続きを簡略化し、チームで取り組み、通級による指導担当教員の負担を省力化することをテーマに研究に取り組んだ。

- ・ 3名の児童を対象として、研究を行った。総合教育センターの指導主事と拠点校の通級による指導担当教員、拠点校がある地域担当の特別支援教育巡回相談員で作業部会を作った（平成31年4月5日、令和元年5月17日、7月11日、8月8日、11月19日、11月22日に部会を開催）。
- ・ アセスメントは主としてASISTとLDI-Rを使用した。通級による指導担当教員と特別支援教育巡回相談員、指導主事に加え、特別支援教育コーディネーターや対象児3名の在籍学級担任もメンバーに加えて、観察による実態把握を行った。拠点校では、数年にわたり「ポジティブな行動支援」の考え方に基づく職員間の協働体制が形成されており、対象児の得意なところや通級による指導で伸ばしたいところの把握が短時間（一人約30分）でできた。
- ・ A児、B児は、本年度初めて通級による指導を利用する2・4年生であり、2名とも在籍学級での失敗経験の蓄積から学習意欲が低下している傾向がみられた。個別の指導計画の目標設定では、その部分の改善が主たるねらいとなり、個別の指導計画にも反映された。通級による指導での自立活動を利用したポジティブな自己理解を促すことにより、学習意欲が改善し、在籍学級での授業における学習意欲も高まった。指導後に実施したASISTにおいても、数項目で不適應感の改善が見られた。
- ・ C児は、通級による指導を継続して利用している6年生である。中学校進学に向けて、自分が以前よりできるようになったこと、通級による指導を受けて成長したことの振り返りを指導内容に加えた。拠点校で実施したアンケート（令和元年9月・令和2年2月に実施）において、不安感や不適應感が改善し、自己評価ながら向社会性にも向上が見られた。

（２）通級による指導担当教員が通常の学級の担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

専門家による学校コンサルテーションを実施し、通級による指導担当教員と通常の学級の担任の連携について指導を受けた。

また、拠点校において校内研修を実施して連携方法について共通理解を図った。

・「ポジティブな行動支援」を核とした校内支援体制の構築

日時	参加者	内容
令和元年5月23日	加茂小学校職員 23名 指導主事1名	本年度の研究・研修内容について、共有。取組の説明。

令和元年6月19日	加茂小学校職員 8名 大阪樟蔭女子大学 准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回 相談員2名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 通級による指導の対象児童4名について、コンサルテーションを受ける。 校内の連携・共通理解のため、加茂小パッケージ（仮称）作成について協議。 通級による指導担当教員と研修について打ち合わせ。
令和元年8月8日	加茂小学校職員 19名 指導主事1名	加茂小パッケージの内容検討。校内全体で共有。 通級による指導で実施する自立活動の内容検討。 指導の経過を報告してもらい進捗状況を把握。
令和元年10月15日	加茂小学校職員 7名 大阪樟蔭女子大学 准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回 相談員1名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 通級による指導の対象児童4名について、コンサルテーションを受けた。 加茂小パッケージについて、進捗状況を確認。支援ニーズ表、単元テスト活用表などの運用を確認。
令和2年1月21日	加茂小学校職員 4名 指導主事1名	加茂小パッケージの運用状況について確認。情報共有。 ポスター発表について内容検討。

学校全体で取り組むポジティブな行動支援で培った力を背景として、発達障害の可能性のある児童を含む通常の学級での配慮や支援が必要な児童の支援ニーズ表の作成や単元末テスト情報活用など、効果的な校内支援体制の構築に資する知見（「加茂小パッケージ」）を得ることができた。

【取組事例1】校内共通理解・連携推進ツール「加茂小パッケージ」の開発

拠点校には特別支援教育コーディネーターが3名指名され、低・中・高学年のマネジメントをそれぞれ担当していた。平成28年よりポジティブな行動支援を中心に据えた取組を継続的に進めており、校内支援体制は構築できていたが、定期的にかかれる校内委員会は長時間に及んでいた。また、通級による指導担当教員や特別支援学級担任らと、通常の学級の担任には、児童の実態把握や現状認識、個別の指導計画に基づく指導の方向性などの共有が十分ではなく、ケースによっては指導の基準が一貫しておらず、場当たりの指導によって児童が混乱することもあった。

そのような状態を是正し、他校の取組に資するモデルとなるため、専門家の助言を受けながら、教員間の共通理解指標の開発や効果的・効率的な校内運営の研究を行った（図4）。

2019年度の取り組み

- 単元テストの活用
 - ・テストの結果を分析することで、どこにアプローチすればいいかが分かる仕組み
- 学校全体で共通理解を図るシステム
 - ・共通理解の指標となる支援ニーズ表
 - ・共通理解の場となる校内支援委員会プチ

算数

学年	単元名	観点	1	2	3	4	5	観測別合計	平均
1	思考	○	25	10	0	25	15	25	15
		△	25	20	15	25	15	25	20
		□	50	35	25	30	35	50	35
2	思考	○	30	15	18	25	30	30	24.6
		△	30	25	20	25	25	30	25
		□	90	65	58	80	73	100	73.2
3	思考	○	45	35	25	40	45	45	38
		△	20	10	8	15	20	20	14.6
		□	85	70	48	75	100	100	74.6

得点獲得率

黄色 70~50%

赤色 50%以下

図4 取組の概要

図5 単元テストの活用

まず、学校の通常に行う教育活動の中に、児童の共通理解指標となる情報はないかリソース探しを行い、単元テストの成績処理システムが活用できるのではないかと結論になった。単元テストの成績処理システムは、これまで成績処理にのみ活用していたが、そのデータに色付けをして学習状況を把握すると、通級による指導を受ける児童だけでなく、すべての児童の苦手な単元や分野を把握することができた（図5）。これを校内委員会の資料として活用し、学習面において支援が必要な児童のニーズ把握に役立てた（図6）。

単元テストの成績処理システムを活用することで、特に通級による指導を受けている児童の学習面の情報を共有するきっかけとなった。過去の取組の知見から、学習面でのつまずきが児童の問題行動に結び付きやすい傾向があることが分かっており、早期に支援を投入することで通常の学級における児童の学習意欲の継続に役立った。

テスト番号	単元名	観点	算数					観測別合計	平均
			1	2	3	4	5		
1	思考	○	25	10	0	25	15	25	15
		△	25	20	15	25	15	25	20
		□	50	35	25	30	35	50	35
2	思考	○	30	15	18	25	30	30	24.6
		△	30	25	20	25	25	30	25
		□	90	65	58	80	73	100	73.2
3	思考	○	45	35	25	40	45	45	38
		△	20	10	8	15	20	20	14.6
		□	85	70	48	75	100	100	74.6

図6 実際の処理画面

また、このシステムは通級による指導を行う際にも非常に役立ち、個別的な指導に参考となる学習状況の把握や自立活動の内容検討など多岐にわたる情報を得ることができた。

このように、これまで通常の学級の担任が成績処理にのみ用いていたものが、児童の実態を把握するツールに変わり、校内で共有され、データを効果的に活用することができた。

単元テストの活用と同時並行で、支援ニーズ表の作成にも取り組んだ。これは、校内委員会で通級による指導担当教員が、通常の学級の担任や他の管理職、特別支援教育コーディネーターなどと話し合いをするとき、共通のイメージをもって話ができるようにするために作成したものである（表1）。

また、限られた校内委員会の会議時間で児童の支援や配慮を考えると、会議参加者の認識の「ずれ」が、効果的な支援案の検討を阻み、会議時間を浪費している現状への改善も目的としている。

学習				
層	支援ニーズ	状況	必要な支援	支援案
1	0	・一斉指導でOK	・一斉指導 ・全体への視覚支援(刺激の少ない教室環境等)	
	1	・一斉指導でボーンとしている	・担任から個別の声かけ ・友達からの声かけ ・ペア学習、グループ学習	・座席の配慮(手本になる子の近く)
2	2	・一斉指導で授業内容の理解が難しい ・ヒントがあればできる ・作業ペースが遅い	・T2や支援員が隣につき、声をかける ・ヒントカードや視覚的支援	・校内支援委員会プチ →全体で把握 ・ヒントカードを作成
	3	・T2や支援員が隣についても授業内容の理解が難しい	・担任が放課後学習(授業の補充)	
3	4	・放課後学習では授業内容の理解が追いつかない	・家庭でもプリント等で補充学習	・特別支援教育コーディネーターに相談 →Co.が授業観察して確認
	5	・放課後+家庭での補充でも理解が追いつかない	・通級指導教室(自立活動)の利用	・WISC等の発達検査を進める →個別の学習の場を提案
	6	・通常学級での学習が困難 ・個別学習が必要	・支援学級在籍(個別のペースで教科書で学習を進める)	・個別のペースで学習をする ・基礎基本を中心に学習をする
	7	・教科書での学習が困難 ・個別学習、個別の環境設定が必要	・支援学級在籍(特別的教育課程で学習を進める)	・自立に向けた学習を中心にする

表1 支援ニーズ表(学習)

具体的には、「状況/必要な支援/支援案」を一目でわかるようにした。ポジティブな話し合いを促すことができるように、支援アイデア集も併せて作成し、経験の浅い担任でも具体的な支援につなげられるようにした(表2)。

・一斉指導でボーンとしている	・担任から個別の声かけ ・友達からの声かけ ・ペア学習、グループ学習	座席	・座席の配慮(手本になる子の近く、教師が声かけしやすい場所など)
	・指示を出す前に、注目を集める。	注目	・話し始める時に、全員の視線が集まるまで待つ。 ・話し始める前の合図を決めておいたり、個別に声かけしたりして注目できるようにする。 ・ダーチャレンジ、合図に拍手→タモリ 等。 ・よく話を聞いている子を一番に褒める。それを見て聞きだした子を褒める。さらにそれに気がついて教師の方を見た子を褒める。最後に一番はやく聞いてくれた子に「ありがとう」といってから、説明を始める。
	・授業中に飽きないように注意をコントロールする。	注意コントロール	・授業の途中で「飽きているサイン」がでたら、脱線話をして、注意をリセットする。 ・ペア学習や動きのある学習(単純動作でよい)を入れて、自分もしゃべって出力・動いて出力させる。 ・つまらない内容(自分にとって抽象的で無意味に感じるもの)は頭に残らないので、自身の体験や、子どもたちが想像しやすいものに置き換えて話を進める。
	・つまずいてしまう前にヒントを提示	ヒント	・基本的にヒントは大盤振る舞いで出す。 ・宿題でつまずかないように、答えの紙はちぎらず残して、本人や家の人が確認できるようにしておく。その代わり、計算の過程(筆算など)を残すようにする。残している子を大いに褒める。 ・誤答例(特に算数では効果大)を教える。 ・ありがちな失敗例を先に挙げて説明し、同じ失敗をしないように事前に説明しておく。作業は、全ての教科で役立つと言っても過言ではない。 ・説明が込み入ってしまうようなことが予め予想される授業では、できるだけ子どもが具体的に操作できることに置き換えて伝えるようにする。

表2 支援アイデア集

拠点校では、平成30年度までは校内委員会を年に3回開催していたが、通級による指導担当教員と特別支援教育コーディネーター、養護教諭が連携し、校内の情報を集約するため、毎月3回開催することとした。会議は校内委員会「プチ」と名付け、会議時間はできるだけ15分以内を基本とし、立ったまま会議を行うスタイルとした。また、どの会議にも必ず管理職が出席して情報の把握に努めた（図7）。

その結果、校内の情報共有がスムーズになり、会議の出席者全員が発言するなど、積極性が高まった。通常の学級の担任が抱えている悩みを共有することにもつながり、児童の変化に対して早期に手を打つことにつながった。

支援ニーズ表や支援アイデア集も活用し、ポジティブな行動支援をベースとした校内支援体制の強化につながった。


<p>校内支援委員会プチとは</p> <p>時間：10～15分 頻度：低・中・高に分かれて月1回 対象：学年団、管理職、養護教諭、特別支援教育Co. 内容：各学級ごとに、特別支援に関するエピソードや困っていることなどを報告 →知っていること、意見を共有 →支援が必要な児童についてニーズの検討 ※もっと話し合いが必要な案件は、ケース会へ</p> 	<p>活用方法（校内支援委員会プチ）</p> <ul style="list-style-type: none"> •学級に入ったときに支援すべき児童が分かりやすい •校内で会った児童に声をかけることができる →いいことなら、誰からも褒められる経験に →改善点なら、みんなが見てくれている経験に •支援ニーズを検討する場として活用 •悩みを共有する場として活用
---	---

図7 校内委員会「プチ」の説明



写真3 校内委員会「プチ」の様子

(3) 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究専門家による学校コンサルテーションを実施し、通級による指導担当教員と通常の学級の担任の連携について指導を受けた。

また、拠点校において校内研修を実施し、連携方法について共通理解を図った。

日時	参加者	内容
令和元年6月28日	加茂小学校職員 6名 近畿大学准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回 相談員1名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 2つの学級を抽出して、学級単位でコンサルテーションを実施。その結果を受けて、事例研究として実践。 通級による指導を受ける児童を含むすべての児童が心理的な安定を図るための学級づくりについて指導を受けた。
令和元年10月7日	加茂小学校職員 4名 特別支援教育巡回 相談員1名	事例研究の途中経過聞き取り。調整。 通常の学級の担任へのフォロー。
令和元年11月19日	加茂小学校職員 8名 近畿大学准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回 相談員1名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 事例研究のまとめ。 さらに学級での取組を学校全体へ広げるよう助言を受け、校内で協議。実施計画の作成。
令和元年12月10日	加茂小学校職員 4名 特別支援教育巡回 相談員1名	事例研究の途中経過聞き取り。調整。 通常の学級の担任へのフォロー。
令和2年1月29日	加茂小学校職員 3名 特別支援教育巡回 相談員1名	学校全体でポジティブな行動支援に基づく取組を実施。 通常の学級の担任へのフォロー。
令和2年2月7日	加茂小学校職員 3名 特別支援教育巡回 相談員1名	実践研究報告会(成果報告会)に向けて、ポスター発表内容の検討。 シンポジウムの準備。

【取組事例2】「話し手への注目スキルの獲得」

拠点校の5年生には通級による指導を受けている児童が3名在籍している。注意のコントロールに課題があり、授業中に他の児童の話や発表内容を聞き漏らすことがしばしば見られた。ペア学習などのアクティブ・ラーニングを進めるうえで常に配慮を必要としていた。

そこで、通級による指導担当教員と在籍学級担任で協議し、専門家による助言を受けながら、児童を取組主体とした「ひまわりプロジェクト」(「話し手」を太陽に例え、それに注意を向けて聴く「聞き手」を太陽に向かうひまわりに例えて、授業中に話し手に注意を向けることを促す)を実施した(図8, 9)。

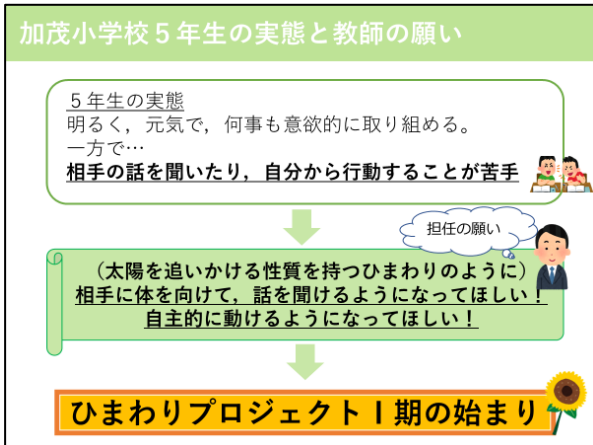


図8 ひまわりプロジェクトⅠ期の概要

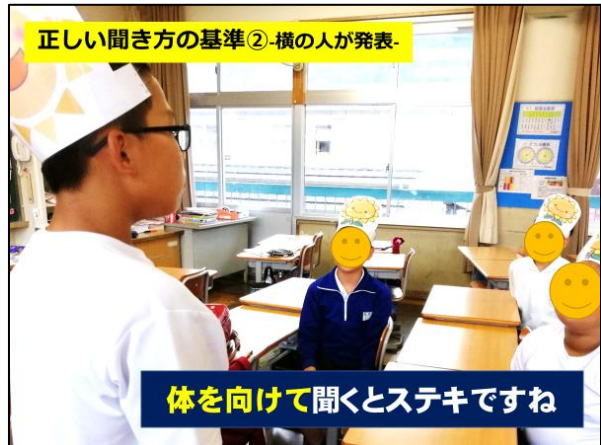


図9 児童向けの説明スライドの例

その結果、通級による指導を受けている児童を含むすべての児童が、話し手に注目できるようになり、特に国語科や算数科の授業において、ペア学習などの学習に効果的であった(図10, 11)。

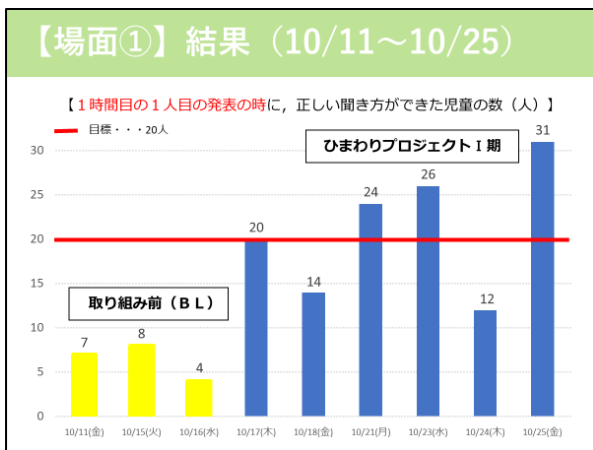


図10 結果のグラフ 取組開始時期

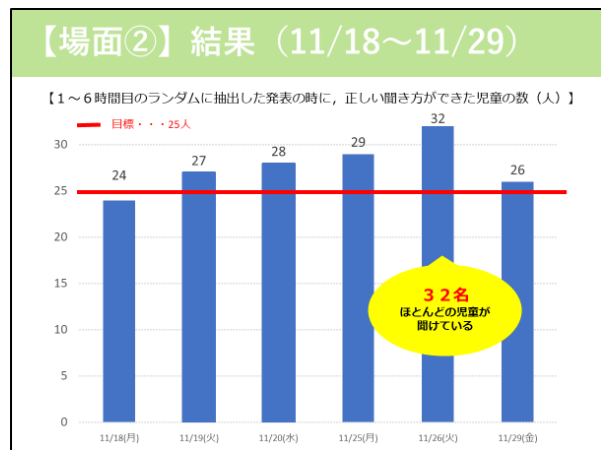


図11 結果のグラフ 途中経過

この取組の成果を受けて、校内で共通理解を図って、5年生児童を中心とした「ひまわりプロジェクト」を他の学年にも広げようと計画した(図12, 13)。

ひまわりプロジェクトⅡ期の概要

「ステキな聞き方を全校に広げる」

○ひまわりプロジェクトⅡ期

目的：5年生の取り組みを学校全体に広げる。

対象：加茂小学校1~6年生
加茂幼稚園5歳児

広げ方：①グループ(4~5人)で担当学級を決める。
②朝活動の時間に、担当学級をまわり「ステキな聞き方」の劇を実演する。
③実演後、各学級で聞き方の記録を取ってもらう。

①伝える
5年生の取り組みを振り返って、全校への伝え方を考える。

②やってみせる(劇)
下級生に、劇を通して、「ステキな聞き方」を実演する。

③まきこむ
各学級の先生方に記録をお願いします。全校にステキな風を広げる。

ひまわりプロジェクトⅡ期のテーマ

図12 ひまわりプロジェクトⅡ期の概要

①伝える (1/14~1/31)

○全校への伝え方を考える。

内容：グループ(4~5人)に分かれて、「ステキな聞き方」の劇をそれぞれ考える。役割を分担して、伝えたい台詞や必要な動きなどを子どもたちが中心に考えて、グループで練習をする。

役割：①ナレーション…1名
②太陽役…1名
③ひまわり役…2~3名

劇の準備物を作っている様子

役に分かれて練習をしている様子

図13 全校へ伝える工夫

この実践には、通級を利用している児童からも積極的に参画して、5年生すべての児童でプロジェクトを立ち上げ、自分たちで計画し、全校へと取組を拡大した。どのように他学年の児童に伝えればよいか、何度も話し合い、練習や工夫を重ねて、寸劇を実施することになった（図14、15）。

通級による指導の枠を超えて、通級による指導を必要とする児童も含む全ての児童にとって必要な学習スキルを全学年に定着させることができた。

② やってみせる (2/3~2/7)

○ステキな聞き方の劇をする。

- ①朝活動の時間、それぞれの担当学級に行き「ステキな聞き方」の劇（5分程度）を実演する。
- ②対象学級の児童も一緒に「ステキな聞き方」のロールプレイに参加してもらう。
- ③終了後、「よく聞けていたね」「上手だったよ」と言葉をかけながら、ひまわりシールを配る。



幼稚園での劇の様子



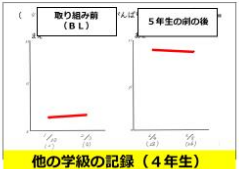
2年生での劇の様子

図14 寸劇など取組の様子


③ まきこむ (2/10~2/14)

○全校で記録をとってもらおう。

- ①事前に、5年生から担当学級の担任に記録用紙を配布し、「聞き方」の記録をお願いする。
- ②（各学級担任は）5年生が劇を実施する前後で、2日ずつ記録を取り結果を5年生に報告する。
- ③回収した各学級の結果を集計して掲示をしたり、集会の時間に、フィードバックをしたりする。



他の学級の記録（4年生）



集会でフィードバックをする様子

図15 全校での結果のグラフ

通級による指導教室の設置がない学校でも拠点校と同様の校内状況を生じているところが多いため、他の学校でも本研究の有効性を確認するために、石井町立高川原小学校を協力校とし、学校コンサルテーションを実施した。

日時	参加者	内容
令和元年6月5日	高川原小学校職員 9名 大阪教育大学特任 准教授 指導主事1名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 学級単位でコンサルテーションを実施。また4名の児童について、事例研究を行うことで合意。 拠点校での取組を紹介し、採り入れてもらうための説明実施。
令和元年11月5日	高川原小学校職員 9名 大阪教育大学特任 准教授 指導主事1名	専門家の指導の下、学校コンサルテーションを実施。 学級単位でコンサルテーションを実施。6月5日に対象としてあげた4名の児童について、事例研究のまとめ実施。
令和2年1月15日	高川原小学校職員 8名 指導主事1名	コンサルテーションの対象児について経過報告、フォローアップ 拠点校での成果の紹介

【取組事例3】「漢字の読みの改善」

協力校には通常の学級で学習面の配慮を受けている児童が多数在籍している。通級による指導は実施していないが、校内努力で個別指導などを行っている。漢字の読み書きが苦手なため、学習意欲が極端に低く、漢字の読み書きの効果的な指導方法や教材を必要としていた。そこで、専門家によるコンサルテーションで助言を受けながら、児童の実態に合わせた教材を作成した（図16）。



図16 専門家の助言を受け作成した漢字の読み学習教材（一部）

本教材を使って学習したところ、漢字に興味を持って学習できる児童が増え、意欲的に学習を進めるようになった。さらに読みが改善することで、意欲が低下しがちであった漢字を書く練習も積極的に取り組むことができるようになった。

- (4) 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究
法政大学の島宗理教授や大阪教育大学野田航准教授などの専門家の指導のもと、子供学習教材を開発した（前掲 図3参照）。

日時	講師	内容
令和元年6月13日	法政大学教授 大阪教育大学准教授 高川原小学校職員 1名 脇町小学校職員1名 指導主事2名	専門家の指導の下、学習教材開発の集合研修を実施。 算数科の単元について、課題分析を行い、学習教材の構成を検討。
令和元年9月4日	脇町小学校職員14名 指導主事1名	検討後、センターで作成・テストした学習教材を実際に取り組んでもらうための説明。
令和元年10月23日	脇町小学校職員5名 指導主事1名	学習教材の取組状況について、進捗状況の把握。 誤答分析。
令和元年11月20日	脇町小学校職員4名 指導主事1名	学習教材の回収。 取り組んでの感想、児童らの反応など聞き取り。 さらなる改善・教材の冊子化に向けた検討。

拠点校や協力校の通級による指導教室及び通常の学級で本年度開発した学習教材や過去に開発した学習教材を使用し、エラーレスの考え方に基づく算数科の指導を行った。

拠点校において、野田航准教授（大阪教育大学）をアドバイザーとし、拠点校において計2回の学校コンサルテーションを実施した。

日時	参加者	内容
令和元年7月11日	加茂小学校職員23名 大阪教育大学准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回相談員1名	算数チャレンジの教育課程上の位置付けについて検討。 算数チャレンジの取組方について専門家による研修会を実施。 各学年で、実施時期・実施内容などデータを基に決定した。
令和元年11月22日	加茂小学校職員22名 大阪教育大学准教授 指導主事1名 特別支援教育巡回相談員1名	1・2学期のデータをもとに取組内容の検討。 各学年で3学期の取組内容の検討。 算数チャレンジの成果のまとめを実施。

アドバイザーの助言を受け、学級毎の児童の実態に応じた授業改善に取り組んだ。「算数チャレンジ（*算数の授業において実施したプログラム）」を拠点校の1～6年生において実施し、基礎計算の流暢性や正確性の向上等、成果が見られた。特に顕著な伸びが見られた学年を中心に抜粋したものが、図17～20である。これは、1分間テストにおける正答数であり、赤は「要支援」、黄は「気になる」、緑は「問題なし」の児童である。

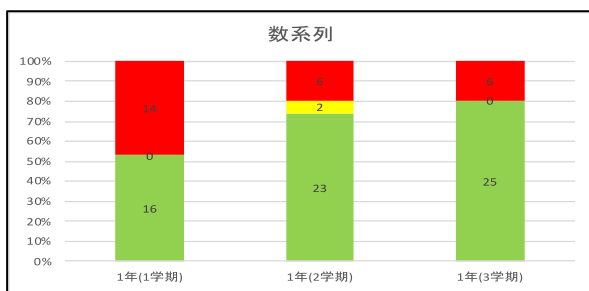


図17 1年生の結果（数系列）

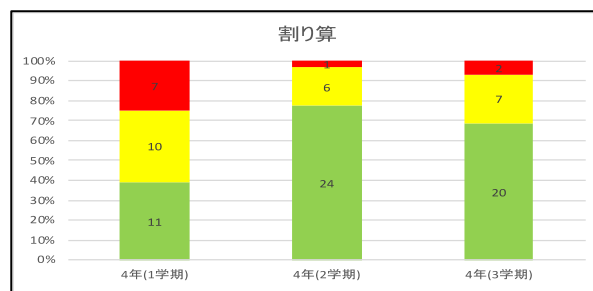


図18 3年生の結果（割り算）

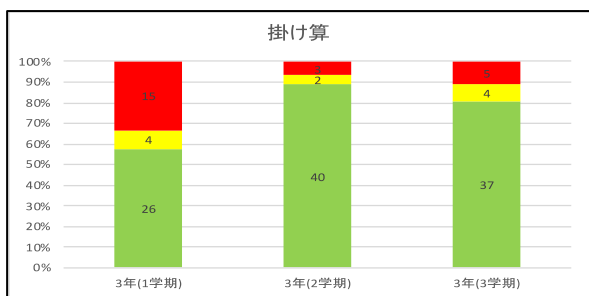


図19 3年生の結果（掛け算）

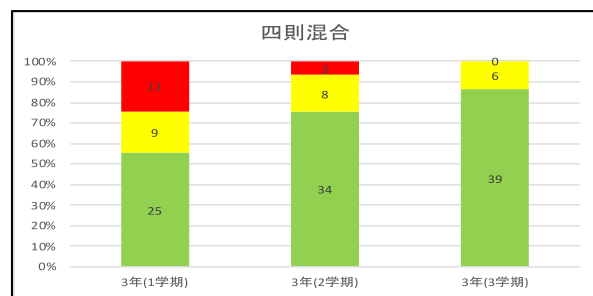


図20 3年生の結果（四則混合）

【学校種：高等学校（徳島県立徳島中央高等学校）】

(1) 通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

拠点校において、大阪樟蔭女子大学の田中善大准教授によるコンサルテーションを実施し、通級による指導担当教員複数が、共通の様式を用いて指導目標と手立てを立案する指導プログラムを試行した。関係者がそれぞれの役割で、「通級による指導」の実践に連携して関わり、担当教員をサポートした（図 21）。

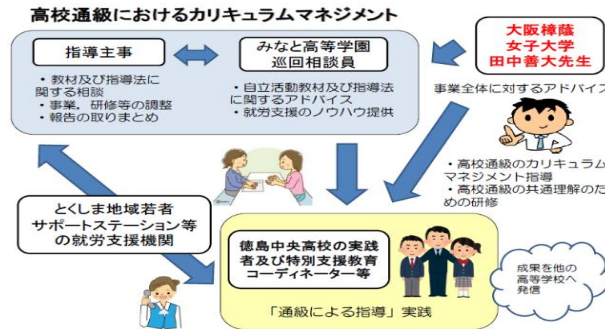


図 21 通級による指導実施校へのサポート体制

日時	参加者	内容
令和元年 6 月 26 日	徳島中央高等学校 教員 9 名 大阪樟蔭女子大学 准教授 指導主事 1 名 班長 1 名 特別支援教育巡回 相談員 2 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業見学及び研究協議 ・ ポジティブな行動支援について ・ 実態把握の方法，共通理解による目標設定，行動の観察と記録の方法等，具体的な取組の概要について ・ 教職員間の情報共有のシステム化の必要性について
令和元年 9 月 14 日	徳島中央高等学校 教員 9 名 大阪樟蔭女子大学 准教授 指導主事 1 名 班長 1 名 特別支援教育巡回 相談員 1 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業見学及び研究協議 ・ 個々の生徒に関するケース相談 ・ ポジティブな行動支援に基づく実践（行動データの収集，行動データの活用） ・ 教職員研修の実施
令和 2 年 1 月 14 日	徳島中央高等学校 教員 9 名 大阪樟蔭女子大学 准教授 指導主事 1 名 班長 1 名 特別支援教育巡回 相談員 1 名	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業見学及び研究協議 ・ 個々の生徒に関するケース相談と目標に対する評価について ・ 今年度取組の有効性の検証 ・ 教職員間の情報共有に関する成果と今後のシステム化に向けた課題

次の3つの共通様式を用いて、3つのステップ（①実態把握、②長期・短期目標の設定、③実践）で、通級による指導担当教員3名が、共通理解を図り実践を行った。

ア. 実態把握（プロフィールチェック表の活用）

学級担任がプロフィールチェック表を活用し、実態把握を行った。「通級による指導検討委員会」において、生徒が通級による指導を受けることが適切かどうか判断する資料とした。通級による指導担当教員はこのプロフィールチェック表を活用し、実践を重ねるごとに適宜見直しを行った（図 22）。

生徒プロフィールチェック表

<生徒プロフィールチェック>

- * 特徴・課題を把握&共通理解→適切な指導へ
- * 自己理解を助ける→自覚を促し成長を助ける
- * できることを認める→本人の自己肯定感を高める
- * 特に気になる生徒がいる場合、わかる範囲でご記入ください。
- * 部分的な記入や記述部分だけの記入でもかまいません。

生徒氏名	(年 組)
記録年月日	年 月 日
記録者	

	項目	状況			備考（具体例や補足事項を記入） 例：かがみ文字、文字間のスペースがない、投げる動作ができない、何故指導しても指示が通らない、忘れ物が多すぎる
		1	2	3	
学習面	全体での指示理解（聞く）	できる	できないときもある	難しい	
	文章の内容理解（読む）	できる	できないときもある	難しい	
	論理的な説明（話す）	できる	できないときもある	難しい	
	ノートの書き写し（書く）	できる	できないときもある	難しい	
	正しい文章の記述（書く）	できる	できないときもある	難しい	
	集中力の持続	できる	できないときもある	難しい	
	自分の特性理解	できる	できないときもある	難しい	
運動面	全体での指示理解	できる	できないときもある	難しい	
	体の動き	スムーズ	やや固い	ぎこちない	
	姿勢の保持	できる	できないときもある	難しい	
	手先の器用さ	ある	ややある	ない	
	自分の特性理解	できる	できないときもある	難しい	
対人関係	感情のコントロール	できる	できないときもある	難しい	
	自分の行為の結果予測	できる	できないときもある	難しい	
	アドバイスの受け容れ	できる	できないときもある	難しい	
	ルールの尊重	できる	できないときもある	難しい	
	約束の遵守	できる	できないときもある	難しい	
	威言	ない	時々ある	よくある	
	他者の感情の理解	できる	できないときもある	難しい	
	自分の気持ちの説明	できる	できないときもある	難しい	
	他者や大人に対して	寛容	どちらともいえない	排他的	
臨機応変な対応（こだわり）	できる	できないときもある	難しい		
生活面	時間の管理	できる	できないときもある	難しい	
	持ち物の管理	できる	できないときもある	難しい	
	身だしなみ	整っている	どちらともいえない	整っていない	
その他	気になることについて、お書きください。				

図 22 生徒プロフィールチェック表

イ. 長期目標・短期目標の設定（目標設定・情報共有のための話し合いシートの活用）

通級による指導担当教員が学級担任をはじめ、対象生徒に関係する先生方と話し合いをする際に活用する。プロフィールチェック表（図 22）による課題をもとに、目標設定・情報共有のための話し合いシート（図 23）に記入しながら、実態の中で優先すべき項目を考慮して、1年後達成できそうな目標、将来につながる目標を長期目標に設定した。そこから、達成可能であり、具体的で数値化できる行動について、短期目標を設定した。

「通級による指導」 目標設定・情報共有のための話し合いシート

生徒の日常生活の困り感や支援ニーズについて、先生方で情報共有しましょう。

対象生徒	HRNO() 氏名()
話し合い日時	年 月 日 ()
先生方の考える課題 (生徒が日常生活で困っていること、周囲との人間関係やトラブル、授業での難しさ など)	
学級担任 (先生)	
学級副担任 (先生)	
授業担当 (先生)	
〇〇担当(※) (先生)	
通級担当 (先生)	

※ ほかに、他の授業や部活や進路等、生徒に関係する先生（支援員の先生含む）

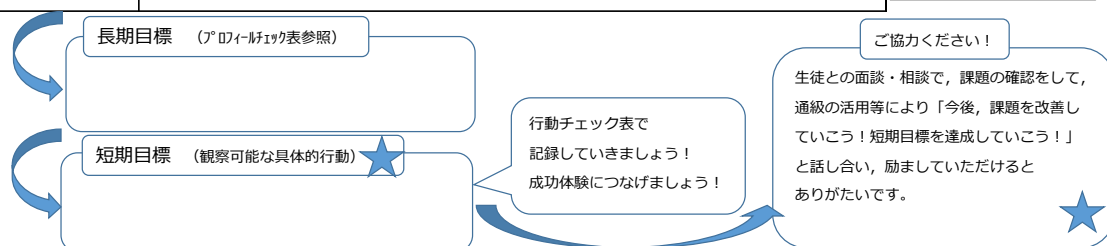


図 23 目標設定・情報共有のための話し合いシート

ウ. 実践（行動チェック表の活用による記録と振り返り）

設定された短期目標について、実践の様子を行動チェック表（図 24）に記録する。指導の記録を取ることで、生徒の変容の様子を客観的に把握することができ、生徒にフィードバックしたり、学級担任等と共有したりすることができた。また、電子掲示板の活用により、指導の記録を専門家等と共有することで、適切な助言を得ることができた。

ア～ウの取組を継続し、巡回相談員による定期的な教育相談の活用と電子掲示板等の活用による専門家からの即時的な助言等のサポート体制により、ポジティブな行動支援にもとづく実践をすすめることができた。行動データを収集し、活用することで、通級による指導担当教員が、指導の成果を客観的に確認しながら授業の内容充実を図るとともに、生徒に前向きなフィードバックを与えることができたようになった。

生徒名	
担当教員	

行動チェック表

☆9月カレンダー

観察により、行動の様子
を記録しましょう！

	分類	項目
長期目標	学習・運動・対人・生活	
短期目標		

☆行動に関する記録方法

○：
△：
×：
／：観察なし
(生徒の欠席・先生が行動の状況を確認できなかった・
行事等で授業なし など)

月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

月末のふりかえり	
所感等	通級担当 ()
	学級担任 ()
通級内の先生方で回覧 (感想等の共有)	

図 24 行動チェック表

【取組事例】自己肯定感の低さが課題となっている生徒への支援

自分の気持ちを説明できず、返事が「無理」「イヤ」「全部」であった生徒の行動の裏にある自己肯定感の低さに注目し、「自己肯定感を高める」を長期目標として設定した。

自己肯定感を高めるためには、「できた」という経験が継続して必要だと考え、「授業で実施している認知力を高めるプリント学習を利用することにした。専門家等からの助言により、できた枚数をグラフ化して視覚化することやポジティブな行動支援の考え方を取り入れ、枚数をこなしたくなる手立てを考え、短期目標を「(認知力を高める)プリント学習において決められた枚数や内容をするができる」とし実践した。

取組の様子を観察し「行動チェック表」を用いて記録したところ、生徒設定数や実施枚数が少ないものの達成度100%が続いたため、この短期目標は達成できたとし、「プリント学習において、終了の報告をすることができる」という新たな短期目標を設定して学習を継続・発展させた。

視覚的にフィードバックすることで、生徒にとってプラスに働き、少しではあるが自信がついてきたようだった。それに伴い、学校生活でも前向きな態度が見られるようになった。

(2) 通級による指導の担当教員が通常の学級の担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

専門家による学校コンサルテーションを実施し、通級による指導担当教員と通常の学級の担任の連携について指導を受けた。

また、拠点校において校内研修を実施して連携方法について共通理解を図った。

日時	参加者	内容
令和元年9月14日	徳島中央高等学校 教員25名 大阪樟蔭女子大学准 教授 指導主事1名 班長1名 特別支援教育巡回相 談員1名	「高等学校で取り組むポジティブな行動支援」 ・ポジティブな行動支援の考え方 ・支援のABCと成功体験の重要性 ・具体的な行動に注目し、データを測定 ・教職員間の情報共有のシステム化

教職員研修を機に、教職員全体にポジティブな行動支援の考え方について共通理解が図られた。通級による指導担当教員が、行動チェック表を活用し、月末のふり返しとして、通常の学級の担任をはじめ教員間で、毎月の取組や生徒観察の状況を報告し情報共有することができた。

(3) 発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究
将来の社会的自立のためのスキルを身につける学習として、「キャリアアップトレーニング」を実施し、ビジネスマナーやストレスマネジメントなど、関係機関と連携し職業的自立を目指した学習内容の充実を図った。

とくしま地域若者サポートステーションとの連携により、ストレスマネジメントに関して年間4回の出前授業を行った。また、出前授業実施後には、ストレスマネジメントのふり返りの学習を行い、定着を図った。

日時	参加者	内容
令和元年10月11日 10月25日 10月31日	徳島中央高等学校 教員2名 とくしま地域若者サ ポートステーション 職員2名	(出前授業) 「ストレスマネジメント」 ・ストレスへの対応法
令和元年11月7日	徳島中央高等学校 教員2名 とくしま地域若者サ ポートステーション 職員2名 指導主事1名 特別支援教育巡回相 談員2名	(出前授業) 「ストレスマネジメント」 ・ストレスへの対応法 ・ストレス反応チェックシート (協議) ・生徒に関する相談

- (4) 発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究
人間関係の形成やコミュニケーションなどを苦手とする生徒について、自己理解を進めるための取組も含めた「ライフスキルトレーニング」を実施し、基礎的なコミュニケーションスキルの向上を図るための学習を実施した。
個々の生徒のケースに応じて、目標の設定及び適切な評価の在り方に関する相談を含め、コミュニケーションスキルを高めるための学習内容について協議を行った。

日時	参加者	内容
令和元年9月2日	徳島中央高等学校 教員4名 指導主事1名 特別支援教育巡回相談員2名	・効果的なコンサルテーションのための事前協議 ・コミュニケーションスキルを高めるための具体的な教材や手立て
令和元年12月17日	徳島中央高等学校 教員4名 指導主事1名 特別支援教育巡回相談員1名	・ポジティブな言動を引き出す手立て ・人間関係形成のための適切な言葉づかい ・認知機能を高めるトレーニングの効果的な実施方法

6. 今後の課題と対応

- (1) 子供学習教材作成のための教員養成プログラムの運用、改善
- ・作成した教材を徳島県立総合教育センターのホームページで公開し、県内での普及に向けて広報を行う。併せて通常の学級での授業改善を事例化し、徳島県立総合教育センターのホームページで公開し、広報する。
 - ・教材の作成手法を持つ教員を中心に引き続き教材作成に取り組み、児童らのニーズを的確に把握し、つまずきに合わせた改善を行っていく。
- (2) 高校通級における指導内容のさらなる充実
- ・目標の設定及び適切な評価の在り方について、拠点校において、共通様式を用いた今年度の取組を継続し、事例化することでデータベース化を図る。校内での情報共有を推進するとともに、協力校にも知見を共有することで、取組の拡大を図る。
 - ・関係機関との連携により、生徒の将来の社会的自立に向けたスキルを養うため、より実践的な学習活動を展開する。
- (3) 通級による指導ハンドブック、通級による指導啓発資料の積極的活用、研修での活用
- ・本年度作成した「通級による指導ハンドブック」と「通級による指導啓発資料」を徳島県立総合教育センターの職務研修等において積極的に活用したい。
 - ・通級による指導担当教員が効果的に活用できたかどうかアンケート等において検証し、今後の指導内容の充実に向けて取り組んでいきたい。
- (4) 「ポジティブな行動支援」の有効性の検証
- ・拠点校での取組を通して、通級による指導を受けている児童の指導方法や校内委員会を中心とする教職員間の連携に際して「ポジティブな行動支援」の有効性が

確認できた。

- ・今後、拠点校で作成した校内共通理解ツールである「加茂小パッケージ」をさらに充実させて、他の学校での校内支援体制の強化に活用したい。また、それと併せて、ポジティブな行動支援の実施校を拡大していきたい。

7. 拠点校について

(小学校)

拠点校名：徳島県三好郡東みよし町立加茂小学校												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	29	1	36	2	41	2	34	1	34	1	49	2
特別支援学級	4		2		5		0		0		2	
通級による指導 (対象者数)	0		1		3		3		3		1	
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	1	1	15	1	0	1	2	3	0	4	29

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：3人

※特別支援学級の対象としている障害種：知的障害、自閉症・情緒障害

※通級による指導の対象としている障害種：LD

(高等学校)

拠点校名：徳島県立徳島中央高等学校												
課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計		
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数			
定時制	昼間部 普通科	87	3	73	3	60	3	17	2			
	通級による指導 (対象者数)	0		4		8						
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	1	2	1	21			9	9	1	1	1	37

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1

※通級による指導の対象としている障害種：自閉症、ADHD、LD、情緒障害

8. 問い合わせ先

組織名：徳島県教育委員会

担当部署：徳島県教育委員会特別支援教育課